

# エンゲージメント

## 第 5 章

Kumari

A close-up photograph of a person's hand, palm up, holding a stream of glowing golden particles. The background is dark with a bright light source at the top, creating a lens flare effect. The overall mood is hopeful and uplifting.

## 第 5 章

『おじ様…。私ね、また、あの時と同じ場所を怪我しちゃった。初めておじ様にお会いした日、おばあちゃんのお通夜の日よ。あの時、私、猫に顔を蹴られてしまって…。ほら、ここ、この場所、おじ様が手当てをしてくれたでしょ、その時、「おじさんが手当てをしたからにはもう大丈夫」って言ってくれたけど、また同じ場所を怪我しちゃった。おじ様、なぜ笑っているの？ あ、私のこと間抜けな娘だ<sup>こ</sup>って思っているんでしょ？ 他人<sup>ひと</sup>からもよくそう言われるわ。でもよかった。おじ様は亡くなったって聞いていたから、お元気そうで安心しました』

\*

\*

美希子とミシェルがローザの家を訪ねた日から三日が過ぎていた。

怪我の手当てに明日もいらっしやい、とふたりが帰る際にローザは美希子に声を掛けていたが、この三日間、美希子は一度もローザの家を訪ねては来ていない。またミシエルのほうも明け方の砂浜に姿を見せていなかった。

乾燥させたハイビスカスの花に熱湯を注いでいると、電話のベルが鳴った。夜も明けていない時間であるがローザの家ではそう珍しいことではなかった。時差の異なる国からヒーリング依頼が入る時はよくこんな時間に電話が掛かってきたものである。四コールが鳴り響いたところで受話器を取ると、電話の相手はミシェルだった。ローザの声を確認すると彼はすぐに用件を話し出した。

「美希子が目を覚まさないのです！」

とても緊迫した声だった。

「それはいつからですか？」

冷静にローザは訊き返した。

「先日、あなたの家から戻ってからです。すごく眠いと言って彼女は倒れ込むようにベッドに横になったのですが、その日から起きてこないのです」

「落ち着きなさい。ミシェル」

そう言ってローザはミシェルを落ち着かせると、美希子を無理に起こさないように言い、夜が明けたら自分がそちらに向かうことを告げて受話器を置こうとした。すると、

「あなたは昔、医師かナースだったのでしょうか？」

ローザの落ち着いた口調を不思議に思いはじめた様子で、ミシェルはそうローザに尋ねてきた。

ローザは、「いいえ」とだけ答えて静かに受話器を置いた。

外はまだ暗く、ローザはミシエルの家に向く前にいつものように海辺に出て瞑想と祈りを捧げた。しばらくするとローザの脛に静かな池が広がり、そこに白い蓮の花が浮かびあがった。泥水の水面に浮かびながらも清浄感のある白い花にはどのような意味が込められているのか…。ローザはその答えをしばらく待ち続けていたが、白い蓮の花は無言のまま何も語ることはなかった。それでも白い蓮の花から放たれるエネルギーはローザの心身を浄化し、その心地よさに彼女は身を任せた。

闇夜に浮かぶ蓮の花に、朝の光りが差し込んでいく。  
(そろそろ、まいりますか)

ローザは静かに脛を開けた。目の前には朝陽に染まった海原が広がっている。彼女はゆっくり立ち上がった。

五百メートルほど歩くと真っ白な家の玄関先に着いた。階段を数段ほど上ると広いテラスが現れ、今の今まで手すりから身を乗り出すようにして、そこに立ちつくしていたと思われるミシエルの残像がローザの目に映し出された。

ローザが玄関の前に立つとすぐに扉は開いた。ローザはドアチャイムに触れようとした人さし指をそのままに、突然に出迎えてくれたミシエルに驚きの表情を隠せずにいた。

「わたくしがここに立っていることを、よくわかりましたね？」

「今まで、ローザが歩いてくるのをテラスで見っていましたから」

早口でそう答えると、ミシエルはローザを家の中に迎え入れ、すぐに美希子のいる寝室に案内しようとした。

ローザのほうは慌てることなく持ってきたハイビスカスのハーブティーをミシエルに手渡したが、彼の意識はすでに美希子の部屋に向かっており、受け取ったハーブティーはそのままりビングのテーブルの上に置かれた。

「あなたの足の方はどう？」

美希子の部屋に向かう途中、ローザはミシエルの足に巻かれている所々汚れた包帯が気になり、歩きながら怪我の具合を本人に聞いたが、「大丈夫です」と、僕のことなどは気にしないで下さいと言わんばかりの、そっけない返事が返された。

一階廊下の、突き当たりにある部屋の前でミシェルは足を止めた。

「この部屋に美希子は居ます」

ミ歇尔の手でゆっくりと扉は開かれた。

ローザは美希子の部屋に足を踏み入れていく。部屋の中から心地よい風が流れてきた。美希子はローザの気配もまったく気付かずに、顔をローザのほうに向けてうつ伏せで眠っていた。ローザは数歩あるいて足を止めた。

「この部屋の窓はあなたが開けてあげたのですか？」

美希子は窓辺に置かれたベッドの上で眠っているが、その窓を開けるには、ベッド越しに手を伸ばして開けなければならぬ。

「ええ。今朝、僕が開けました。その時も美希子はまったく目を覚ましませんでした」

「そう」

ローザはベッドの上に横たわる美希子の姿を見つめながら、足を進めていく。

部屋の中はほのかにラベンダーの香りが漂っており、周りを見渡すと、ハーブ入りの小さな巾着袋が美希子の枕元に置かれていた。それは美希子とミ歇尔がローザの家を訪ねて来た日、帰り際にローザが彼女にプレゼントしたものだった。

美希子は自分の首に両方の腕を交差するようにしてうつ伏せで眠っていた。顔は横向きで枕の上ののっているが、見るからに首のあたりが辛そうな寝姿だった。

「美希子はいつもこんなふうに、うつ伏せで寝ているの？」

「僕も初めて気付きました。僕達寝室は別ですから。ただこの三日間は今のような姿勢で彼女は眠っています」

ミ歇尔もローザと並んで美希子の寝姿をじっと見ている。彼が美希子の寝姿を見るのは今回が初めてだった。

ミ歇尔の不安そうな視線を感じながらもローザは美希子の枕元に行くと、床に膝を落とし、少しのあいだ美希子のことを見ている。彼女は大丈夫でしょうか、とミ歇尔がそう言おうとした時、

「ミ歇尔、大丈夫よ」

ローザのほうに先にそう答え、静かに微笑んだ。

「あなたの心配をよそに、美希子は何か楽しそうな夢でも見ているわ。そんな顔をしている、それよりも傷の方はどうなったかしら」

ローザは美希子の額に手をのせて体温を確認した。ローザの手が額に触れていても美希子は眠り続けている。美希子の体温は平熱だった。

ローザに手当てをして頂いた日から美希子は傷口を下にして眠っており、ガーゼはそのままだった。ミシェルから大きなため息が漏れるとローザも彼のあとに続いて大きく深呼吸をした。そして、これから力仕事でもするかのように彼女は立ち上がり、美希子の腰まで掛けられているダウンケットを静かにはがしはじめた。

「ミシェル、手を貸して下さる？ 美希子の体を仰向けにしてあげましょう。そうすれば傷の手当ても出来るわ」

「彼女は大丈夫でしょうか」

先ほどローザは、大丈夫よ、と言ったが、一向に目を覚まさない美希子はどうかになってしまったのではないだろうか、ミシエルのほうは不安が増すばかりだった。

ローザはそれには答えず、彼と呼吸を合わせるようにして美希子の体をゆっくりと仰向けにしていった。丈長のハワイアンムームーの裾から美希子の細い足が露わになったが、それさえも気づくことなく彼女は眠っている。ローザはそと美希子の顔を横に向けると三日間当てたままのガーゼを剥がしはじめた。

ミシェルはローザのうしろに下がった。三日間ものあいだ傷の手当てをしなかったことで、美希子の傷口はかなり悪化してしまっているだろうと思うと、急に怖くなった。そして彼の不安を煽るようにローザの口から、「まあ」と、声が漏れた。

だが、そのあとローザが美希子の傷について話した言葉は、意外なものだった。

「ミシェル、あの痛々しかった傷口がこんなによくなっています。ここに来てあなたも彼女の傷口をよく見てごらんさい」

美希子の顔の傷は、剥がしたガーゼには薬の軟膏以外何の付着物もなく、正直、ローザも驚いた。三日もの間、傷口を下にして眠っていたということは熱が籠り、美希子の傷口はかなりのダメージを受けているに違いないと思っていただけに、出血や化膿による汚れのないガーゼは意外なものだった。

だがこの時、

カノジョノ、キズグチヲ、ヨクミテゴランナサイ…

今しがたローザの言ったその言葉は、ミシェルにとってどこか聞き覚えのあるものだった。遠い記憶を呼び覚ますかのように、彼の胸を刺激した。しかし、それは数日前に美希子と話した、マウイ島は波動のよいところであるといった言葉を誰に聞いたのか思い出せないように、今回も、いつ、どこで「カノジョノ、キズグチヲ、ヨクミテゴランナサイ」などの言葉を聞いたのか……思い出すことはできなかった。

ミシェルはその言葉をすぐに頭から切り離れた。

ローザに促されるままミシェルは美希子の傷口を覗き込んだ。ローザの言ったとおり美希子の顔の傷は治癒に向かっていた。

「ミシェル、眠るという行為は凄いですね、美希子の傷口がこんなに癒えているなんて」

ローザは感心したようにそう言い、ミシェルに目を向けた。

「美希子はこの傷を癒すために眠っているのですか？」

ミシェルもローザを見る。

「おそらく美希子は眠っているのではなく眠らされているのでしょう。それも自分自身に。彼女は何かの拍子に体の力が抜け落ちたのかも知れませんね」

「体のチカラ？」

「ええ。美希子は長いあいだ深い眠りをとることができずにいたのでしょう。人は、心でも体でも傷を負ってしまった時、治癒力を高める為に、眠りなさい、と自分の奥深い場所からそんな信号が出ていると言われてます。それほどまでに眠るという行為は大切なものなのです。だけど傷を負ってしまうと、その痛みや苦しみによって過剰な力が体に入り込んでしまい、なかなか自分の声に従えなくなってしまうのも、それもまた人間なのよ。でもね、その力が何かの拍子で抜け落ちた時、ひたすら美希子のように眠り続けることがあるのです」

ローザは慌てる様子をまったく見せずに、服のポケットを手でさぐりながら答えていく。そしてポケットから小さな容器を取り出し、「これは軟膏よ」と言った。

ミシェルは、部屋のボードの上に置かれている救急箱から新しいガーゼを取り出した。ローザはそれを受け取り、軟膏を指先にのせると手際よく美希子の手当てをはじめていく。ミシエルの表情に少しの翳りが見えはじめた。美希子を苦しめているのは自分以外の誰者でもないことを思うと、彼の心は痛んだ。

だがこのあとローザは、今のミシエルの心情をかばうようにこう言った。「彼女のこの度の深い眠りは、あなたと出会う前の、それもかなり前の傷を癒していると思われるわ」

そう言ったあとローザは美希子の傷口に軟膏を塗りつけていた手を止め、少しのあいだ美希子の顔を見ていた。そして

「ねえミシエル、美希子は日本にいた時、何かとても辛い想いをしていませんでしたか？」

この時ローザが美希子のことで気にかけてしたのは、この度の顔の傷ではなく、過去に受けたと思われる心のほうの傷だった。

だが…、

「ええ。その彼女を助けたのが…」

『指輪が…』

この時、ふたつの言葉が同時にローザの耳に入り込んだ。

美希子ではない女性の声で、「指輪が…」と、うわずった声が部屋のどこからか聞こえてきたのである。しかしその声気付いたのはローザだけであり、ミシエルのほうは何も聞こえていないようだった。彼は今のローザの問いかけに、「ええ。その彼女を助けたのが…」と答えたあと、言葉を詰まらせた。

すると、

『指輪が…見当たらない』

またローザにの耳に女性の声が入り込んだ。その声の主を探ろうとしてローザはゆっくりと回りを見渡した。と、ローザの視線が美希子の胸の上で止まった。美希子の体の上にブロンズヘアの青い瞳をした女性がボンヤリと浮かびあがっている。

沈黙が続いていく。

ローザは深く息を吸いこんだ。そして、

『指輪って？』

声を出さずに女性に尋ねた。

『ネックレスに通して首に下げていた大切な指輪が、どこにも見当たらないの』

美希子の寝顔とは反対にその女性は真っ赤に目を腫らし、そう答えた。

『大切な指輪？』

『結婚指輪、ターコイズの…』

女性の声はとても苦しそうだった。

ローザはまた大きく深呼吸をしたあと、ミシエルに目を向けた。

「ねえミシエル、美希子は普段、ネックレスはしていなかったかしら？」

「ネックレス？」

今までの話の流れからいけば、日本での美希子のことについて何か確信に迫るような話をローザから聞かされるのではないだろうかと思っただけに、ミシエルは少し拍子抜けした。ローザの知りたいことは今ひとつわからぬままだったが、彼は訊かれるままに美希子の物欲のなさをローザに話しはじめた。



「美希子は<sup>ひかりもの</sup>光物やアクセサリ一類は何ひとつ身に付けません。今時とても珍しい人です、時計さえもしませんから」  
「そうでしたか。それよりミシェル、美希子はもう大丈夫そうね。あなたも少し休みなさい。テラスでハーブティーでもどうぞ。わたくしが彼女の傍におりますから」

ローザとの会話は一転二転していた。

ミシェルは釈然としないまま美希子の顔を覗き込んだ。

夢の中で遠い親戚のオジとの会話を楽しんでいる美希子の寝顔は、確かにふたりの大人が傍に付き添ってまで心配するほどのことではなさそうだった。ミシエルのほうもそれ以上、ローザとの会話を求めることなく静かに部屋を後にした。

しかし美希子とは別に今、ローザの目の前には赤く目を腫らした肉体を持たぬ女性が立っている。ローザは白い壁を見つめるように、そこにじっと立ち、美希子の上にボンヤリと浮かんでいる女性の姿をしばらく見つめていた。そして、『あなたは？ そこに眠っている<sup>かのじょ</sup>美希子と、何か関係のある人ですか？』

そっと女性に話しかけてみた。

『……』

目を腫らした女性は涙で会話が出来ない様子だった。何も言わずに二回ほど小さく頷いた。

『もしかして美希子は、あなたの生まれ代わりですか？』

『……』

女性はまた無言で頷いた。

『そう。いつの時代、美希子はそんな美しいブロンズヘアをしていたのでしょうか。でも、あなたは どうして今、ここに？』

ローザは落ち着いた口調で尋ねていく。

無くしてしまったネックレスのせいなのか女性は自分の首の回りを手で探りながら、天井の方に目を向け、部屋の香りを嗅いでいる仕草を見せている。そして『この香り…』と、呟いた。ローザの今の問いかけは聞こえていなかった様子で、

『ああ。この香り…あの方が近くにいるはずなの』

そう呟きながら彼女はしきりに辺りを気にしていた。

『この香り、とは、この部屋のハーブの香りですか？ あの人は、もしかしてあなたのご主人のこと？』

ローザは尋ねていく。女性はまた小さく頷いた。

『ええ。この薬草の匂いはあの人の体に染み付いたものなの。あの人が、あの時のように私のことを探しに来ているわ。だから、早く結婚指輪を探さなくては』

『あの時って？』

『あの時も、彼は私のことを必死に探して下さっていたの。だけど、山のように積まれていた人達もみんなブロンズヘアで、顔も下に向けられていたわ。私もそうでした』

「山のように？」

ローザは、山のように積まれて…と聞き、少しのあいだその言葉に焦点を当ててみた。するとこの国なのか、多くの女性の亡骸が無惨な姿で積み重ねられている光景が目の前にふっと浮かび上がった。

『だから彼は私のことを探し出せなかった。横たわっているひとりひとりの指を見て、彼ね、必死にターコイズの指輪を探していたの。でも私…その時…指輪、はめてなかった。すぐ傍に、あの人の香りを感じ取っていたのに、気付いてもらえなかった』

その話によってローザは徐々に彼女の状況を把握していった。だが、目の前に浮かび上がった光景はあまりにも残酷で、声を振り絞って話してくれた彼女に掛ける言葉を見つけられずにいた。そしてまた、美希子の前世と思われる目の前の女性が、生まれ変わってもなお過去から探し続けるターコイズ石の指輪には、どのような想いが込められているのか…、ローザは青く細い指輪をイメージしてみた。

すると、その石には、、浄化と癒し、そして大切なヤクソクが刻まれていることを感じ取った。

『あの時、彼ね、はじめて私に命令したの。穏やかな彼が、はじめて私に』

女性はまたローザに聞いて欲しそうに話しはじめた。

ローザもゆっくりと美希子の過去世に触れていく。

『なんて？ ご主人はその時、なんてあなたに？』

『今度は、真っ黒い髪で生まれって来い、って』

『黒い髪？』

『ええ。そうしたら私のことをすぐに見つけ出せるからって。私を捜しているあいだ、彼はずっとそう言っていたわ』

女性は悲しそうな目をローザに向けて自分のブロンズの髪に触れた。

『あなたは、なぜに、命を落としてしまったのですか？』

女性が消えてしまわぬよう、ローザは慎重に尋ねていく。

『喉と、胸と、お腹、とても強い衝撃を受けました』

女性はそこまで話すと、ふと何かを思い出したかのように、『ああ』と声を漏らした。

『もしかしたら…あの時の喉に受けた衝撃でネックレスが外れてしまったのかも。ああ、きっとそうだわ』

過去世、どのような理由で自分は命を落としてしまったのか、そのことについては女性の口から何も語られることはなかった。彼女はひとり言のように呟いたあと、酷く落胆した。

『ねえ、あなたの下にいる美希子<sup>かのじょ</sup>が喉をかばうような姿勢で、お腹や胸を下に向けて眠っていたの。それはその時の衝撃が関係しているのですか？』

ローザは今の美希子の奇妙な寝姿のことを訊いてみたが、聞こえていなかったのか、女性は『わたしは、結婚指輪もなくしてしまった。もう、あの人の妻である資格も母親になる資格もないわ。弟とのヤクソクも守れなかった』と言った。自分の生まれ変わりと思われる美希子のことよりも、なくしてしまった指輪のことや過去世の家族のことなどをしきりに気にしていた。

女性の家族構成が徐々に把握できていく。

『黒髪に生まれ変わって、ご主人に巡り会うことは出来たのですか？』

ローザのその問いかけに、『はい』と女性は答えた。そして、ゆっくりと両手を動かし、『子供に…会いたい』と、そう言って自分の腹部にそっと手を当てた。

『あなたの、お腹の中にはお子さんがいらしたのですか？』

デリケートな内容だけに、ローザはさらに慎重に話しかけていく。

『ええ。彼の子をやっと授かったのに、わたし…子供…守れなかった』

『……』

子供を守れなかったという記憶を魂に刻み、生まれ変わっている人がこの世の中にどれほど存在しているか、ローザは今までのヒーリングの仕事を通し、過去世の子供探しをしている女性達の多さを知っていた。今までの話の流れからすると目の前の女性の子供は、お腹の中にいる段階で彼女と一緒に命を絶たれてしまったと思われる。

このあとローザは、過去世のご主人は今どうしているのかと、彼女に尋ねてみた。

『長い歳月を掛けてやっと彼、私のことを見つけ出してくれました。だけど…わたし…彼とまた離れてしまいました』  
『どうして？』  
『あの時の、あなたとの大切なヤクソクを果たすためです』  
『あなた、とは、わたくしのことですか？』  
『ええ。あなたとのヤクソクを果たすために彼は私を手放したのです。そして彼の魂は私にこんなことも言いました…』

女性はそこで話を止め、しばらく黙った。

確証はなかったが、女性が話す彼とは、マウイ島に来る前に美希子が付き合っていた日本人の元彼のことだろうとローザは直感した。女性は、今生でもまた過去世の夫と離れ離れになってしまったこと、それがよかったのかどうか答を出せずにいるようだった。

それでも、離れることを選んだ彼女に過去世の夫は何て告げたのか…。ローザは女性の口から次の言葉が出るのを待っていた。

『あの時の子供にも会って来なさい、と彼は言いました』

それが、過去世の夫が彼女を手放した最大の理由かもしれないとローザは思った。だがそこには、それだけではない自分を含めたもっと深い、人間の関わり合いがあるようにも思っていた。

女性の目は窓辺に向けられた。その後はローザを見ることなく、今の言葉を最後にブロンズヘアの女性は、美希子の中に消えていった。

\* \* \*

『おじ様。久しぶりにおじ様に会えてよかった。私が大きくなったら、おじ様のいる小さな島の病院に遊びに行きますってヤクソクしたのに、母も父も親戚の人も、誰もおじ様のいる小さな島を教えて下さらないの。遠い親戚の方だからご迷惑よ、なんて言われてしまって。そう言えばあの時、私に話して下さった、ほら、おじ様が長いこと探し続けていた女性、その方にお会いすることは出来たのですか？ 探し出すことは出来たのですか？ おじ様、黙ってないで何とか言ってください、あの時みたいにお話を聞かせてください』

『……子ちゃん、おじさんは、徳を積むのが足りなくて…大切な人を、まもれ…』

この時、美希子の臉が突然に開いた。

「ミキコ？」

ローザは静かに声をかけた。

(おじ様、徳って？)

「ミキコ、目が覚めましたか？」

ローザの声は届いていない様子で美希子はじっと天井を見つめている。

(おじ様、大切な人がどうしたの？)

「・キコ？」

(おじ様…)

美希子は瞼を開けた人形のように、一点だけを見つめ、しばらく無表情のままであった。

\*

\*

「わたくしのお陰なんて言わないで。彼の傍に美希子がいることが一番なのよ。でもよかったわね、あなたもマウイの砂浜を自由に歩けるようになって」

ミシェルは少しずつ変わってきたと言う。絵を描き始め、美希子の外出の際も過剰な心配をすることもなくなってきた、と。それもこれもローザのお陰だと美希子は言った。

お喋りを楽しみながら色とりどりのハーブに水を与えている美希子の姿をローザはしっかりと目に焼き付けている。

(ねえ美希子、わたくし達は、遠い昔、どのようなヤクソクを交わし合い、今、この時を共に過ごしているのでしょうか)

海辺の賑わいとは別にローザの家では穏やかな時間が流れていた。美希子の、過去世の女性と出会った日以来、ローザはずっとその彼女のことを気にかけていた。美希子にもミシェルにもその女性のごとは話しておらず、ローザの胸にそっとしまわれている。

長い眠りから目覚めた美希子は、顔に負った怪我の手当てのため毎日のようにローザの家を訪ねてくるようになり、いつの間にか庭のハーブの水やりは彼女の担当になっていた。その姿を見るたびにローザは自分と美希子との、過去世の関わり合いをもっと深く知りたいと思うようになっていた。

その日、美希子の顔を覆っていたガーゼは無事に取り外され、その代わりに大きなバンドエイドが張られることになった。家の中に入ると早速、ローザの手当てが施された。美希子は何度も手鏡を持ち、自分の顔を映しては恥ずかしそうに照れ笑いを見せている。

「ねえローザ、ガーゼだといかにも怪我をした人って感じに見えるけど、こんな大きなバンドエイドを顔に貼っていると、何だか私、本当に間抜けな人に見えるわね」

母親にでも話しかけるように美希子はふざけた口調で言った。

「バチあたりなことを言うと、また同じ場所を怪我しますわよ」

ローザも呆れ口調で答え、微笑んだ。

『マタ、オナジバシヨヲ、ケガシマスワヨ』

(また同じ場所か…)

美希子から大きなため息が漏れた。

「そうなってしまったら、三度目だわ」

そう、今度また同じ場所を怪我したら三度目となるのだ。日本語のコトワザにある、二度あることは三度ある、三度目の正直…、それらを考えると、何だか三度目を覚悟しなさいと警告されているような気がして美希子は怖くなった。

早起きは三文の徳…三人寄れば…三つ子の魂…石の上にも…

さほど気にかけてなかった日本のコトワザが次から次へと美希子の脳裏に浮かび上がってくる。

「ねえ、ローザ、よく考えてみると日本のコトワザには三<sup>さん</sup>の数字が関係するものが沢山あるのだけれど、どうしてだろう」

「……」

ふいに、日本のコトワザ、などの言葉が美希子の口から出て、ローザは少し驚いた。何も答えることはできず彼女は黙って首を傾げた。

穏やかな午後…。

腕の方も少しマッサージしましょうと言い、ローザは美希子の腕を取った。ひまし油にラベンダーやミントの精油を混ぜ合わせて美希子の腕のアザにゆっくりとオイルをのぼしていく。ローザの指が滑らかに動き出す。美希子は今のコトワザの話も忘れ、この上ない至福の時に身を委ねていた。ローザの優しさに触れ、美希子は今まで誰にも話したことのないことを、ローザに喋りはじめたのである。

「私もね、時々オイルを使って、日本で付き合っていた彼の背中をよくほぐしてあげていたのよ」

美容師だった美希子は日本でアロマのトリートメント技術を学んだことがあった。日本で暮らしていた頃、当時付き合い合っていた彼に、よくオイルトリートメントを施してあげていたのである。

日本で付き合っていた彼…

美希子はその言葉を言った時、ローザはミシェルと出会ったばかりの頃に『ミキコハ ポクノ シンユウノ コイビト デシタ』と言った、彼の言葉を思い浮かべていた。

「ミシェルにはしてあげないの？」

そのローザの問いかけに、美希子は黙って頷いた。

それ以上ローザは今の話に触れることはなく、静かに美希子の腕に指を滑らせていた。

オイルマッサージを施しているローザの滑らかな指の動きによって、美希子の目は眠たそうに瞬きを繰り返しはじめ、催眠にでもかけられたかのように美希子の唇は、「ローザ」と動いた。

「その元彼ね、ふだん人前で泣くような人ではないのに、オイルマッサージで背中をほぐしてあげていた時に、涙を流していたことがあったのよ。だけど本人が言うには、その時、眠っているような起きているような不思議な感覚の中において、泣くほどの悲しい夢も見えていなかったし、涙を流した自覚もないって…。そんなことがあってからはオイルマッサージをやめてしまったのよ」

ローザの指の動きを見つめたまま、その動きに合わせるようにゆっくりとした口調で美希子は話はじめた。

「どうして、その彼の背中をほぐしてあげていたの」

ローザは手を動かしたまま尋ねていく。

「日本人の彼ね、時々とても奇妙な夢を見ていたの。その夢を見た日は一緒にいる私の肩も不思議と凝ってきて、また変な夢を見たの？って訊くと、彼は必ず頷いたわ。彼の首から下もすごく凝ってしまっていて、そんな時にホホバ油を使ってほぐしてあげていたのよ」

何とも奇妙なその話に、ローザの手は止まった。

「彼はどのような夢を見ていたの？」

真剣味を帯びたローザの目が美希子に向けられた。

思いがけず話し込んでしまった元彼のことで、美希子の目は徐々に冴え渡っていく。

「んー、彼の夢の話はあまり聞かないほうがいいわ」

「そう」

たとえ関心を持ったとしても過剰に訊き出さないのもローザの性格だった。

美希子の腕をマッサージしているあいだローザは彼女の元彼のことを考えていたが、急に激しい睡魔に襲われ、美希子の腕を離れた。

「ごめんなさいね美希子、わたくし少し休ませて頂くわ」

ローザは美希子の腕を離すと、背もたれの大きな籐の椅子に座り込んだ。

「……」 「……」

室内が静まり返る。

「ローザ？」

「……」

自分の腕にマッサージを施してしてくれたローザの手が離れて、眠りにつくまで、本当にあっという間の出来事だった。美希子は驚きを隠せずにいる。ローザは美希子の呼び掛けに応じず、瞼を閉じている。

この数日、ローザは食べ物をあまり受け付けなくなっており、体のほうも衰弱しはじめていた。目眩に襲われるようにもなっていたが、今回は思いのほか激しく、ローザは傍にあった籐の椅子に引き寄せられるように座り込んだのである。その後意識を失くした。それでも急激に痩せ細ることも顔色が悪くなることもなく、ローザの病気のことは美希子もミシェルも気付いていなかった。

倒れ込むように椅子に座り込んだあとまるで息をしていないかのように、ローザは寝息ひとつ立てずに眠っている。そんなローザを見て美希子は、自分にも同じようなことがあったなあと、ふと日本にいた頃のことを思い出した。

日本で付き合っていた彼の前で、疲れたあ、と言っては家のソファーによく倒れ込んだものである。ローザも日本にいた頃の自分のように体が疲れているのだろかと思うと、美希子は自分がそうさせているようで少し辛くなった。

しかし、その時だった、ふいにローザが口を開いたのである。

「美希子、その彼の元には戻らないの？」

美希子は驚いてローザを見た。

しかしローザが目覚めた様子はなく、今のは寝言だったのだろうと、そう解釈して美希子は冷めたハーブティーに口をつけた。それでも寝言とはいえ、絶妙なタイミングで彼の元には戻らないのとローザに訊かれた美希子は、少し胸が苦しくなった。日本で付き合っていた彼には償っても償いきれないような恩を沢山受けてきたのだ。それなのに自分からあっさりと縁を切ったような形でミシェルとマウイ島にやって来たのである。できることならもう一度日本にいるその彼に会い、納得のいく形で別れを告げたいという思いもあるが、今の美希子にはまだ彼にかける言葉は何も見つからなかった。



沈黙のまま時間は流れ、午後の心地よい風が家の中に入り込んだ。美希子のほうもうつつらうつらしはじめた。と、

「美希子、結婚は？」

またローザの声が聞こえた。

(?)

美希子の瞼が開いた。ローザ本人が言ったのか、それともうたた寝の中で夢を見ていたのか…。ローザは瞼を閉じたままにいる。美希子は少し放心した。だが、声の主はやはり目の前にいるローザのようだった。

「やっと彼と巡り会うことが出来たのに、結婚しないの？」

ローザの瞼は閉じているが、彼女は確かに美希子に話しかけている。

美希子はティーカップを両手で包み込むように握り締めると、少し躊躇いがちに結婚について話しはじめた。

「んー、私がね、誰かの妻になるとか、その人の子供を産むとか…。こんな私が出来るのかな、なんてなぜかそんなことを考えてしまって…」

「……」

しかしローザは完全に眠っている様子で、しばらく無言だった。

美希子は眠っている人を相手に、自分の結婚観を真剣に話し込んでいたことに可笑しくなった。（きっとローザはうたた寝の中で夢を見ていて、その夢は眠りにつく前に自分としていた会話がそのまま続けられているのだろう）

美希子はそう解釈した。そう考えると急に肩の力が抜け落ち彼女はソファから立ち上がって大きく深呼吸をした。と、

「美希子サン」

またローザの口が開いた。それは不思議な呼び方だった。普段、ミキコ、と呼んでいるローザがその時は、サン、をつけていたのである。

美希子はローザの顔に目を向けたまま、もう一度ソファに腰を下ろした。

「美希子サン、日本の彼を必要としているのなら、結婚なさい。ただし一つだけ言っておきます」

瞼を閉じたままローザは話をはじめた。

美希子は半ば茫然となりローザのことを見ている。

「美希子サン、あなたはこのマウイ島に来る前、彼と二人で日本の神聖な場所を訪ねておりますね。そこの神様にあなたは、『彼との結婚を諦めます、諦めますからどうかマウイ島に行くことをお許し下さい』と、そう言いました。彼の方はただただあなたの健康と無事を祈っていました。これからも彼と深い結びつきを願っているのですでしたら、もう一度、そこの神様の所へ行ってらっしゃい。そしてまた、その場所で間違いだった祈りを詫び、正しい祈りをしていってらっしゃい。ですが、もしも、このマウイ島に来たことで彼との結びつきを手放そうと思っているのなら、彼の魂を開放してあげなさい。『今まで、ありがとう』と、その言葉を彼に言ってあげなさい。美希子サン、ミシエルのことは心配しなくても、もう大丈夫ですよ」

突然、静かな部屋の中に、ローザの言葉は力強く響いた。

だが、そのあいだもローザの瞼は開かれることはなかった。

「美希子サン。サン、とはわたくしの国では太陽を意味する言葉ですね。日いずる国、日本の言霊では、太陽は、アマテラス、とお呼びする聖なる御名になります...」

第6章に続く